

# 國學院大學學術情報リポジトリ

## ナシ語小学校用教科書『語文』について

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-02-06 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 黒澤, 直道 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.57529/00000983">https://doi.org/10.57529/00000983</a>

# ナシ語小学校用教科書『語文』について

黒澤 直道

## 1. はじめに

ナシ族（納西族）は、中国雲南省西北部の麗江市を中心に、その北に位置する迪慶チベット族自治州や、四川省、チベット自治区の一部地域に居住する少数民族である。その人口は約 32 万人であり、自民族の言語であるナシ語を話す。ナシ語にはいくつかの文字（表記法）があるが、そのうち 1957 年に草案が作成されたローマ字表記法を用いて、ナシ語を記した出版物が公刊されてきた。このような民族語による出版物の作成や流通は、当然のことながら中国の少数民族政策の強い管理の下にある。しかしながら、その内実について政府の担当部門や、教育現場への直接的な調査はもとより行いにくい。そればかりか、日々民族問題の深刻さが伝えられる近年においては、これらはいわゆる「微妙」な問題に属する可能性もある。そこで本稿ではあえてこうした手法を採らず、公刊されたナシ語の小学校用教科書『語文』を分析することで、ナシ族における民族語教材編纂の動向を考察する。

## 2. ナシ族とナシ語の現状

ナシ族は、シナ・チベット語族チベット・ビルマ語群のナシ語を話す。漢語の影響も強く受けている。一部の地域を除き、現在のほとんどのナシ族は、ナシ語と漢語のバイリンガルである。早くから都市化の進んだ麗江市の中心部では、漢族住民の増加に伴って、若い世代を中心にナシ語の使用は衰退していった。さらに 1990 年代以降は、麗江市の旧市街（旧称・大研鎮）で急速な観光地化が進行し、商売を目的とする他地域からの漢族の流入や、居住環境の悪化により、ナシ族住民のほとんどが郊外へと転居したため、旧市街ではナシ語がほとんど聞かれない状況が生まれている。しかし一方で、麗江市の中心部を取り巻く広大な農村部

や、それに隣接する雲南省内の迪慶チベット族自治州と、四川省、チベット自治区の隣接地域に居住するナシ族のコミュニティでは、観光地化の影響もさほど大きくはなく、ナシ語の使用環境が比較的保たれている。

ナシ族には独特の宗教とされるトンバ教（東巴教）があり、その祭司であるトンバ（東巴）によって執り行われる各種の儀礼においては、トンバ文字やゴバ文字といった特殊な文字で書かれた経典（トンバ経典、ゴバ経典）が用いられる。トンバ文字は「ナシ象形文字」とも呼ばれる特徴的な絵文字であるが、実際の経典の文字の運用においては、発音の近い他の文字を借りて音を記す方法も多用される。また、文字と言語の要素とが十分に対応しないため、トンバ文字は経典の内容を熟知しているトンバのみが使いこなすことができる。一方、ゴバ文字は、一字が一音節に対応する文字であり、一見合理的なように見えるが、実際には同音の多数の異体字があり、それを使いこなすことは容易ではない。さらに、かつて書かれたトンバ教の経典のうち、ゴバ文字で書かれたものは冊数にしておよそ一割ばかりと思われる。

これらの伝統的な文字は、もとより宗教的な用途を主とするものであり、トンバが減少し、トンバ教の宗教活動が衰退した現在においては、一部を除いて本来の使われ方はほとんど見られない。一方で、近年の観光地化においては、トンバ教やトンバ文字にナシ族の独特な文化としてスポットライトがあたり、観光物産、商店の看板、道路標識などにデザインとしてのトンバ文字が記されることも多くなった。

### 3. ナシ語の表記法とナシ語出版物

上述の主として宗教に関わる伝統的な文字のほか、ナシ語には複数の文字（表記法）が作られている。早くは1930年代にキリスト教宣教師によって作られた文字があるが<sup>1</sup>、ナシ族の中にキリスト教が広まらなかつ

---

<sup>1</sup> オランダ人宣教師 Scharten による『マルコ福音』の翻訳 *MA-HSI MARK* (British & Foreign Bible Society, Shanghai, 1932) が出版されているが、これ以外の聖書（もしくは

たことから、その後はほぼ使われることがなかった。1949年の中華人民共和国成立以降には、他の南方の少数民族と同様に、1950年代に行われた言語調査を基にしてローマ字による表記法が作成され、「納西族文字方案」として公表された<sup>2</sup>。その後、この表記法は1966年から始まる10年間の文化大革命時期に停滞を強いられるものの、文革収束後の1981年には、雲南省民族事務委員会・雲南省少数民族語文指導工作委员会拡大会議で、麗江ナシ族自治州における「納西族文字方案」の試験的な実施が決定された<sup>3</sup>。このプロセスの中で複数回の修訂を経ながら、ローマ字によるナシ語の表記法はナシ語出版物に使用されていった。

1980年代以降に公開されたナシ語の出版物には、『語文』（すなわち「言語・文字」）や『数学』<sup>4</sup>などの小学校用教科書類、科学・法律知識の普及を目的とした読み物類、民謡や快板と呼ばれるカスタネットを用いた劇の脚本類、トンバ經典の言語でナシ族の神話を記した古典文学類などがある。これらのナシ語出版物は、神話のテキストを除き、実際に話されている口語のナシ語で記されているという点で極めて貴重であるが、ナシ族独特の文化として世に知られるトンバ教やトンバ文字に関する出版物に比べると、それぞれの発行部数は決して多くはなく、ナシ族の中での流通も限られている。この背景には、学术界さらには一般社会において、ナシ族の文化とと言えばトンバ文化（もしくはその象形文字）という見方が強く、ナシ族自身もこれに応ずる形で研究や活動を展開してきた側面があると思われる。

とはいえ、「納西族文字方案」のローマ字表記法による書籍の出版は、

---

その一部）の翻訳・出版は確認されていない。

<sup>2</sup> 1957年、「納西族文字方案（草案）」は雲南省少数民族語文科学討論会第一次会議で承認され、さらに国家レベルの中央民族事務委員会で批准された（「納西拼音文記事」『麗江納西文報』納西族自治州民族宗教事務局、第80期、2002年2月8日）。

<sup>3</sup> 和志武『納西語基礎語法』雲南民族出版社、1987年、p. 1。

<sup>4</sup> 本稿では直接取り扱わないが、1987～1988年に麗江納西族自治州教育局・民語委『納西文小学課本 数学 第一冊～第四冊』（雲南民族出版社）、2008年に楊一紅翻訳『義務教育課程標準実験教科書 数学 一年級 上冊』、和潔珍翻訳『義務教育課程標準実験教科書 数学 一年級 下冊』（ともに雲南民族出版社）が出版されている。

ナシ族の民族語による出版物として現在に至るまで綿々と続けられている。また、近年では1990年代以降の急激な観光地化による現地社会の変容により、1990年代後半からナシ族の自民族文化への眼差しが変化してきており、トンバ文字などの宗教文化だけでなく、自民族の言語であるナシ語が着目されるようになってきた。地元の研究者を中心に、失われゆくナシ語の言語伝承を記録しようという動きがあり、その中で「納西族文字方案」のローマ字表記法の使用と出版は重要な働きをなしている<sup>5</sup>。

#### 4. ナシ語版小学校用教科書『語文』の出版



第一期のナシ語版『語文』

ナシ語で記された小学校用教科書の『語文』には、1980年代に出版されたものと、2000年代以降に出版されたものの二種がある。以下、本稿では前者を第一期、後者を第二期と呼ぶことにする。これらの教科書の詳細については、巻末の一覧に記した。

第一期の出版は、麗江納西族自治州教育局・民語委<sup>6</sup>によるものであり、1986年から1988年にかけて『納西文小学課本 語文』というタイトルで、第一冊から第六冊が雲南民族出版社より出版されている。また、これに先立つ

<sup>5</sup> 2016年には「納西族語言遺產系列叢書」として、和潔珍・和秀清・和繼先・肖煜光『納西族勞作歌選』、和潔珍・和秀清・和順林・和洪生『納西族長調選（1）』、和潔珍・楊一紅・和潤英・和正鈞『納西族長調選（2）』、和潔珍・木誠・和学俊・楊文涛『納西語台詞選』（いずれも雲南民族出版社）が出版されている。

<sup>6</sup> 「民族語言文字工作委員會」の略称。ただし、第二冊と第四冊では「民委會」の表記となっている。また、第一冊と第二冊では教育局と民語委の「改編」とされ、第三冊以降では「編訳」と記されている。前者（特に第一冊）では、漢語の発音のローマ字表記法（漢語拼音方案）とは全く異なるナシ語の表記法の説明が多くを占めるため、「改編」と記したと思われる。

1985年には、麗江納西族自治県語委会<sup>7</sup>による『納西文課本』（一冊のみ）も、雲南民族出版社より出版されている<sup>8</sup>。全六冊からなる『納西文小学課本 語文』は、当時広く用いられていた漢語による小学校用教科書『語文』（人民教育出版社）の翻訳である。ただし、ナシ語の教科書として編み直すにあたり、練習問題は独自にナシ語に合わせて作り直すといった工夫が見られ、特に第六冊ではナシ族居住地域の概況や、ナシ族独特の文化などについて述べたテキストも含まれている。さらに、1990年に出版された『納西文小学課本 語文（補助読本）一』は、『納西文小学課本 語文』の補助教材という位置づけではあるが、その内容は「YIGGV NAQXI DDIUQ（麗江——ナシ族の故郷）」、「NAQXI TEI'EE ZZIUQ（ナシ族の文字）」、「NAQXI DOBBAQ JEQ（ナシ族のトンバ経典）」、「SIUQ NEIQ ZEIL GGE NAQXI ZZERBEE（豊富で多彩なナシ族民謡）」などといった、ナシ族居住地域の風土やナシ族文化に関するテキストが含まれている。書名には「一」と

あるので、この補助教材がさらに継続して出版される計画があったことも窺われる。

また、この第一期の出版においては、麗江納西族自治県教育局・民語委によって当時の麗江ナシ族自治県に住むリス族の言語であるリス語版の『語文』も同時に作成され、出版されている。麗江の民族語言文字工作委員会ではナシ語の出版物とリス語の出版物の双方を扱っており、特に近年はリス語の担当者的人数が多い。これにはリス族がナシ族に比

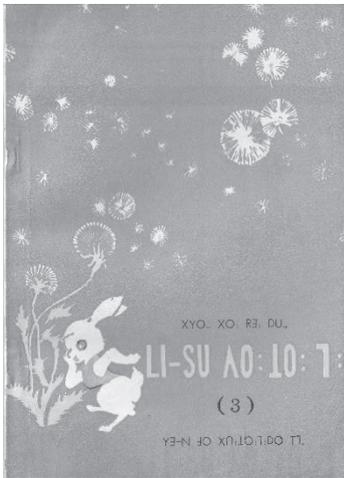


ナシ語版『語文』（補助読本）

<sup>7</sup> 「語言文字工作委員会」の略称。

<sup>8</sup> この教科書には、ナシ語のローマ字表記法、会話文、民謡、散文、領収書・借用書など応用文、手紙の書き方、民話、諺などが含まれており、その多くがナシ族の文化に根差した内容である。

べて標高の高い山地に住んでおり、漢語の普及率の低さから民族語の出版物の発行に重点が置かれてきたという背景がある。また、この時期の雲南省内の他の幾つかの民族言語の文字においても、同じように『語文』の教科書が編まれているが、それぞれの言語・文字に合わせた改編が見られる<sup>9</sup>。



### リス語版『語文』3年生

後に置かれる練習問題においても、第一期のようなナシ語版独自の工夫は見られず、元の漢語の練習問題のままとなっている。

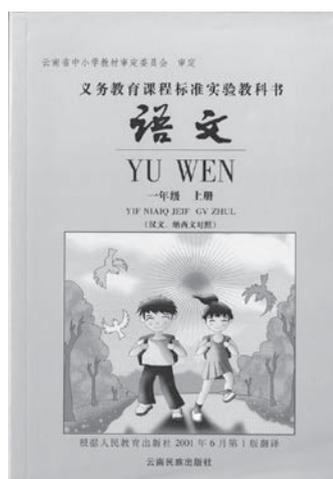
実は第二期の『語文』の出版は、ただナシ語版の発行のみならず、雲南省内の18種の民族言語の文字で横並びに行われたものである。これらの文字は、四川・貴州・雲南ミャオ文字（川黔滇苗文）、雲南東北ミャオ文字（滇東北苗文）、トゥルン文字（独龍文）、イ文字（彝文）、ハニ文字（哈

一方、2000年代以降に出版された第二期の出版では、元になる人民教育出版社の『義務教育課程標準実験教科書 語文』のテキストと図版をそのまま使い、文章の間に空白を設けてナシ語のローマ字テキストを挿入するという方法を採用している。一年級（一年生）の上冊のように、漢語の発音のローマ字表記法（漢語拼音方案）の説明が多くを占める部分でも、第一期のようにナシ語のローマ字表記法に合わせた改編をすることなく、そのまま図版を使用しているため、ナシ語のローマ字の表記法についての説明を欠いた状態となっている。また、各課の

<sup>9</sup> 雲南省では、シブソンパンナ・タイ文字（西双版纳傣文）、徳宏タイ文字（徳宏傣文）などでの出版が確認できる。また、雲南省に隣接する地域では、四川省でのイ文字（彝文）、広西チワン族自治区でのチワン文字（壮文）による『語文』の教科書などが出版されている。

尼文)、リス文字 (傣傣文)、シブソンパンナー・タイ文字 (西双版纳傣文)、徳宏タイ文字 (徳宏傣文)、チンポー文字 (景颇文)、ツァワ文字 (載瓦文)、ワ文字 (佤文)、ラフ文字 (拉祜文)、ナシ文字 (納西文)、ペー文字 (白文)、チワン文字 (壮文)、ムン方言ヤオ文字 (門方言瑶文)、ミェン方言ヤオ文字 (勉方言瑶文)、チベット文字 (藏文) の 18 種である。

興味深いことに、第二期のナシ語版『語文』のテキストを詳しく見てゆくと、一部のページのテキストのタイトルに他の民族言語の文字が書かれていることがある。これは最初に作った言語の版のファイルを、他



### 第二期のナシ語版『語文』

の言語の版を作る上でも流用しているため、タイトルの部分で気が付きにくいために直し忘れたのであろう。この件からも窺えるように、同時並行で各言語の版を作成するというプロセスはかなり突貫工事的なものであると思われ、実際にテキストには誤植や表記の不統一も散見される。

第二期のナシ語版『語文』は、まず 2003 年から 2012 年にかけて初版が出版され、さらに 2011 年から 2016 年にかけてその改訂版が出版されている。元の漢語版『語文』がカラー刷りであるのに対し、初版は白黒刷りでの出版であった。改訂版に至ってようやく、元の漢語版と同様のカラー刷りとなった。本稿では初版を単色版、改訂版を彩色版と呼ぶことにする。

単色版のテキストについて、筆者がその一部を現地の小学校で教えているナシ族教師の友人に見せ、意味の分からないところを訊ねたところ、「こういう言い方は聞いたことがない」といった疑問の声も聞かれた。ナシ語の中にも村々に方言があり、ナシ語の書き言葉の標準化が進んでいない現状では、一部にはあまり一般的ではない語彙や言い回しや、そ

の訳者独特の造語などが含まれているためであろう。さらに、彩色版は単色版の改訂版であることから、様々な問題が解決しているかのように思われるが、実際には彩色版の方が誤植が増えていることもある。これは出版のプロセスにおいて、ナシ語の校正ができる人員が不足していることを物語っている。

## 5. 第一期と第二期の違いと完成度

第一期のナシ語版『語文』においては、第一冊から第六冊の全てにおいて、練習問題はナシ語に合わせた問題に改編されている。また、挿絵についても、人物がナシ族の民族衣装を着たものに描き直されており、ナシ族にとって身近に感じる工夫がなされている。以下では、これら以外の漢語版『語文』からの改編について、各冊ごとに見てゆく。

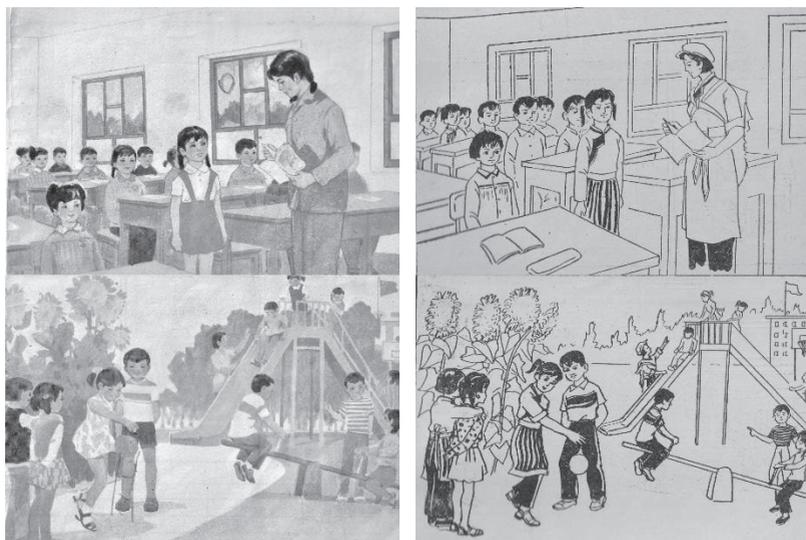
第一冊においては、漢語のローマ字表記法や漢字の学習が主となる部分（「漢語拼音」、「看図拼音識字」、「看図学詞学句」、「生字表」）は、全てナシ語のローマ字表記法を学習する内容に入れ替えられている。また、漢語版『語文』第21課の「ガチョウ」（韻文）は、異なる内容のナシ語童謡「YUIQLIAILMO（お月様）」に入れ替えられ、漢語版『語文』第23課「雪かき」は、新作民謡の「ZHEILCEIF CHEQ TV YEL（政策がここに現れた）」に入れ替えられている。前者は内容よりも韻文の作風を重視して童謡に置き換えたものであり、後者は深く雪が積もることのない当地の風土を考慮して、異なる内容に差し替えたと見られる。

第二冊には、漢語版・ナシ語版とも全40課のテキストがあり、ナシ語版独自の改編は見られない。また、第三冊には、漢語版・ナシ語版とも全35課（閲読課文32課＋独立閲読課文3課）があり、ナシ語版独自の改編は見られない。

第四冊では、漢語版『語文』第3課の「春暁」は、ナシ語民謡「GULCHAIDAI NEE DDEEQ（共産党は偉大だ）」に入れ替えられ、漢語版『語文』第13課の「静夜思」は、ナシ語の諺語「DDAIQ GAI SSVQ ME JJUQ（有能なものには敵なし）」に入れ替えられている。このように、漢語の古典詩はナシ

語の韻文作品に入れ替えられている。これは漢語の韻文は、そのままナシ語に翻訳すると形式的な風格を保つのが難しいためと思われる。それ以外の部分では、漢語版・ナシ語版ともに全31課を含み改編はない。

第五冊では、漢語版が全36課（閲読課文32課＋独立閲読課文4課）があるのに対し、ナシ語版は全21課のみで、大幅にテキストが少なくなっている。また、第六冊では、漢語版が全36課（閲読課文32課＋独立



『語文』（1年）漢語版（左）とナシ語版（右）の口絵。先生と女の子の服が民族衣装に描き直されている。

閲読課文4課）があるのに対し、ナシ語版は全25課のみであり、これも大幅にテキストが少なくなっている。これは、第五冊と第六冊の前書きにあるように<sup>10</sup>、高学年では漢語の学習を増やし、民族語を減らすという

<sup>10</sup> 第五冊と第六冊の前書きでは、「ナシ語文と漢語文をともに学ぶ学生は、三年生以降は、漢語を増やして教えなければならない。しかし、ナシ語文も捨ててしまうわけにはいかないので、ナシ語文の教科書にはやや少なく、いくつかの課に減らして編んである。」と述べられている。

方針に従ったものである<sup>11</sup>。

また、第六冊では、漢語版にはなく、ナシ語版のみのオリジナルのテキストが含まれている。これらは、第4課「NAQXICVF（ナシ族）」、第5課「YIGGVDDIUQ（麗江）」、第19課「HAIQ YIBBIQ（金沙江）」である。これらの内容はナシ族そのものの理解と、その居住する風土という民族的な意識の醸成に欠かせないものである。

一方、第二期のナシ語版『語文』においては、一年級から六年級までを通じ、全体の構成においては漢語版『語文』のテキストと図版をそのまま用い、空白を開けてナシ語のテキストを挿入しただけである。各課の後にある付録・練習問題などは翻訳せず、そのまま漢語版が掲載されているだけである。第一期ではこれらをいずれもナシ語に合わせて作り直していたのに対し、安易であることは否めない。さらに高学年になると翻訳文自体が省略されるものが増えるため、その場合はもはや漢語版との差異はなくなっている。また、第一期のような挿絵の描き直しといったナシ語版独自の工夫も見られない。ただ、これは同時に発行された他の言語の版でも同様である。

第二期の六年級（上下冊）では、ナシ語に訳されたテキストが大幅に減っている。漢語版の上冊では、通常の28課と自由選択の「選読課文」

---

<sup>11</sup> 中国における漢語と少数民族語の二言語教育（双語教育）には様々な議論があり、実際に少数民族の教育現場で行われている二言語教育にも様々な状況がある（岡本雅享『中国の少数民族教育と言語政策【増補改訂版】』社会評論社、2008年、p.114-120）。ナシ族のような南方少数民族にしばしば見られるのは、このケースのように小学校低学年で母語である少数民族語の読み書きを教えつつも、最終的には漢語の習得に収斂させてゆくという考えである。ただし、実際にこうした教育がナシ族の居住地域で行われてきたとは言い難い。ナシ族の居住地域では、1980年代から1990年代の初めにかけては、麗江の中心部から遠く離れた農村部の幾つかの小学校で、識字教育としてナシ語の教育が試みられただけであった。次世代への継承を目的としたナシ語の教育は、急激な観光地化が進んだ1990年代末以降に、ナシ族の伝統文化であるトンパ文化の伝承の一環として始まったものである。しかし、その時点でのナシ語の教育は、ナシ族の子供に母語であるナシ語の読み書きを教えるということよりは、すでにナシ語を話せなくなっている子供に対して、自民族の言語であるナシ語を教えるものに変化していた。それは、ナシ語の読み書きを習熟するというよりは、自民族のルーツに触れるという程度のものであり、実際の授業時間数も極めて少ない状態に留まっている。

が8課あるが、このうちナシ語に訳されているものは、通常の14課と一部の詩歌のみである。漢語版の下冊では、通常の21課と詩歌が10篇、総合復習が9課あるが、このうちナシ語に訳されているのは通常の10課と詩歌10篇のみである。これは第一期でも見られた、高学年においてナシ語の分量を減らすという方針に沿ったものである。

第二期の元になった漢語版『語文』には、第一期の元となった漢語版『語文』に収録されていたものと同じテキストも見られる。ただそのナシ語の翻訳は大幅に異なる文章となっており、第二期の翻訳者は第一期のナシ語のテキストを参照していないと思われる。

以上に見たように、第一期と第二期を比べると、第二期は印刷・装丁の面では綺麗なものとなっている反面、第一期のようなナシ語版独自の工夫はほとんどなく、その完成度は高くないと言えよう。

## 6. ナシ語表記法の諸問題

ナシ語のローマ字表記法を用いてナシ語を記す者を悩ませる事柄の一つに、分かち書きの問題がある。「納西族文字方案」の作成から改訂・実施のプロセスと、それを用いた書籍の出版の過程において、ナシ語のローマ字表記における分かち書きのルールは現在まで明確に策定されてこなかった。それぞれの出版物の著者・編集者が、それぞれの考えで記述してきたのが実際である。ナシ語版『語文』のテキストにおいても、この問題は避けて通れないものとなっている。

ナシ語の場合、分かち書きの問題は、主として、1. 複合語を一続きに書くかどうか、2. 単語の補足成分（接頭辞・接尾辞）を続けて書くかどうか、3. 文の補足成分（助詞）を続けて書くかどうか、に分けられる。第一期のテキストにおいては、必ずしも細かなルールは作られていないものの、1と2についてはなるべく一続きに記そうする意図が見られ、その方が実際に読みやすい。ナシ語の単語は、基本単語には一音節一形態素からなるものも多いが、同時に二音節二形態素からなる複合語や、三音節以上の複合語も多いためである。これに対して、第二期のテキストでは、

文章は単語ごとに区切られるのではなく、全て音節ごとにスペースが入れられている。これによって、分かち書きの問題は回避されることになったわけだが、当然、単語の切れ目が分かりにくくなり、全体に読みにくいものとなってしまった。

第二期のテキストの中で、一点、興味深いのは、二年級の上冊にのみ、部分的に第一期のような、なるべく単語ごとに纏めようとする書き方が見られることである。これは、この一冊の翻訳者が、第一期の出版物の時期にも各種のナシ語書籍の翻訳を多く担当した、前の世代の人物であるからであろう。これは第二期の改訂を経た彩色版においても、部分的に残されている。全てを音節区切りで記すという書き方には、前の世代の翻訳者には抵抗感があったのだと思われる。

ナシ語のローマ字表記法は、1957年に草案が作成されて以来、複数回の改訂が行われている。近年では大きな改訂は示されていないが、出版物においては表記の差異が見られることがある。その一つに、軟口蓋の有声摩擦音[y]の表記がある。この子音は、組み合わせる母音が二つしかなく、出現する環境が限定的であることから、1957年の草案の段階から記号は充てられていなかった。1980年代初期の修訂案においてもこれは同様であったが、その後のナシ語ローマ字による出版物の作成の中で、現場の担当者には記述の上での不都合が感じられていたのであろう。一方、ナシ族文化の普及活動を進め、「麗江市納西文化伝習協会」を主宰する和学光氏は、1957年以来のローマ字表記法に独自の改訂を加えており、その中で軟口蓋の有声摩擦音[y]に、hhの表記を充てている<sup>12</sup>。ナシ語版『語文』の第二期では、単色版においてこの案が取り入れられた。しかし、その後の彩色版においては、この方法は一転採用されず、子音の記号を記さない従来方式に戻っている。

この他にも、例えば音節[teia]を記す場合に、jaと記すのか、あるいはjiaと記すのかといった詳細は、必ずしも明確に決められておらず、

---

<sup>12</sup> 和学光主編『納西語文講義 創刊号』麗江市納西文化伝習協会編印、2009年、p. 1。

『語文』を始めとする出版物においては、今に至るも不統一のままとなつてしまっている。極端な場合には、一冊の書籍の同じページの中でも統一が取れていないことすらある。

## 7. おわりに —— ナシ語版『語文』の将来

以上に見たように、これまでに出版されたナシ語版『語文』の大部分は、漢語版『語文』の翻訳である。ただし、第一期のナシ語版『語文』には、ナシ語やナシ族居住地の独自の文化・風土に関する改編があり、それをメインとして編まれた補助教材も存在した。しかし、近年の第二期のナシ語版『語文』では、そのようなナシ族の風土や文化への視点は全く見られないものとなつてしまっている。第二期の『語文』では、雲南省の18種の民族文字での同時期の発行という統一性が強調される反面、ナシ族とナシ語の独自要素が削られ、ナシ族の子供たちが自民族の言語で自民族文化を学ぶという動機付けの面では大きく後退してしまった。

こうした状況を受けて、2018年6月28日には、麗江市教育局において、雲南省民族語言文字工作委員会、麗江市民族宗教事務局、麗江市古城区及び玉龍ナシ族自治県の担当者と、ナシ語教育が行われている小学校、幼稚園の教師らが参加した座談会が開かれ、また、これに先立って古城区と玉龍県内の複数の小学校においてナシ語の教育と教材に関する調査が行われた。この中で、教科書の内容はナシ族の伝統文化と密接に関係させること、そこにはナシ族の歴史文化を含み、神話伝説、民話、童謡、詩歌、諺、謎々、民族の祭り、自然環境と地名、衣食住など風俗習慣といったナシ族の歴史文化を含むべきことが参加者より提言された<sup>13</sup>。このようなナシ族文化への眼差しは、まさに1980年代に出版された第一期の『語文』とその関連書籍において見られたものである。

上述したように、ナシ族の居住する地域は1990年代以降に急激な観光

---

<sup>13</sup> 【玉龍関注】如何編写納西文課本、傳承納西族母語？納西族專家學者實地考察指點迷津『玉龍之窗』（玉龍県宣伝部・微博アカウント）2018年6月29日。「納西文課本編審工作啓動」『麗江日報』2018年7月1日。

地化が進行し、漢族文化の影響が強まるにつれ、ナシ語やナシ族独特の民族文化の消失が懸念されてきた。2000年代以降に盛んになるナシ文化やナシ語の伝承教育の展開は、こうした危機感の表れである。ナシ語の教材をナシ族の文化や風土と緊密に連携させる考えも、こうした危機感を背景としたものである。このような方向性が急激な観光地化の以前に作成された第一期のナシ語版『語文』の編纂の姿勢と通じることは示唆的である。

近年の中国における深刻な民族問題を背景として、チベット、ウイグル、モンゴルなどの地域においては、民族語教育の幅が狭められていることが伝えられている。ナシ族の状況は、これら少数民族の中の「大民族」と一概に比べられるものではないが、今後、ナシ語の教材において上に述べたような民族の独自色を出すことが果たして可能なのかどうかは、未だに不確定な部分があるであろう。

本稿は、日本学術振興会科学研究費補助金「ナシ学確立を目指した歴史史料の基盤整備と前近代ナシ族社会経済史の研究」（基盤研究C（18K01018）、研究代表者・山田勅之）による研究成果の一部である。

### 『語文』教科書および関連書籍目録

〔第一期〕

麗江納西族自治州教育局・民語委改編『納西文小学課本 語文 第一冊』  
雲南民族出版社, 1986年10月。(発行部数 2200冊)

麗江納西族自治州教育局・民委會改編『納西文小学課本 語文 第二冊』  
雲南民族出版社, 1987年3月。(発行部数 1200冊)

麗江納西族自治州教育局・民語委編訳『納西文小学課本 語文 第三冊』  
雲南民族出版社, 1987年11月。(発行部数 1200冊)

麗江納西族自治州教育局・民委會編訳『納西文小学課本 語文 第四冊』  
雲南民族出版社, 1988年3月。(発行部数 1200冊)

麗江納西族自治州教育局・民語委編訳『納西文小学課本 語文 第五冊』  
雲南民族出版社, 1988年8月。(発行部数 700冊)

麗江納西族自治州教育局・民語委編訳『納西文小学課本 語文 第六冊』  
雲南民族出版社, 1988年11月。(発行部数 700冊)

〔第一期の元となる漢語版教科書〕<sup>14</sup>

人民教育出版社語文一室編『六年制小学課本(試用本) 語文 第一冊』人  
民教育出版社, 1987年11月。

人民教育出版社語文一室編『六年制小学課本(試用本) 語文 第二冊』人  
民教育出版社, 1988年5月。

人民教育出版社語文一室編『六年制小学課本(試用本) 語文 第三冊』人  
民教育出版社, 1987年11月。

人民教育出版社語文一室編『六年制小学課本(試用本) 語文 第四冊』人  
民教育出版社, 1988年5月。

人民教育出版社語文一室編『六年制小学課本(試用本) 語文 第五冊』人  
民教育出版社, 1987年11月。

人民教育出版社語文一室編『六年制小学課本(試用本) 語文 第六冊』人  
民教育出版社, 1988年5月。

〔第一期・関連書籍〕

麗江納西族自治州語委会編『納西文課本』雲南民族出版社, 1985年1月。  
(発行部数 30200冊)

和学才編訳『納西文小学課本 語文(補助読本) 一』雲南民族出版社, 1990  
年12月。(発行部数 700冊、一のみ出版)

---

<sup>14</sup> 本稿で参照したものは、いずれも人民教育出版社第二版の広西出版総社による重印である。

〔第二期・単色版〕<sup>15</sup>

- 和潔珍翻訳『義務教育課程標準実験教科書 語文 一年級 上冊』雲南民族出版社, 2003年10月。(発行部数 4000冊)
- 楊一紅翻訳『義務教育課程標準実験教科書 語文 一年級 下冊』雲南民族出版社, 2005年7月。(発行部数 3000冊)
- 和学才翻訳『義務教育課程標準実験教科書 語文 二年級 上冊』雲南民族出版社, 2005年7月。(発行部数 3000冊)
- 趙慶蓮翻訳『義務教育課程標準実験教科書 語文 二年級 下冊』雲南民族出版社, 2005年7月。(発行部数 2000冊)
- 和潔珍翻訳『義務教育課程標準実験教科書 語文 三年級 上冊』雲南民族出版社, 2006年7月。(発行部数 3000冊)
- 趙慶蓮翻訳『義務教育課程標準実験教科書 語文 三年級 下冊』雲南民族出版社, 2006年7月。(発行部数 3000冊)
- 和秀清・和潔珍翻訳『義務教育課程標準実験教科書 語文 四年級 上冊』雲南民族出版社, 2009年12月。(発行部数不明)
- 楊一紅翻訳『義務教育課程標準実験教科書 語文 四年級 下冊』雲南民族出版社, 2009年12月。(発行部数不明)
- 楊文涛翻訳『義務教育課程標準実験教科書 語文 五年級 上冊』雲南民族出版社, 2011年12月。(発行部数不明)
- 楊一紅翻訳『義務教育課程標準実験教科書 語文 五年級 下冊』雲南民族出版社, 2011年12月。(発行部数不明)
- 楊一紅翻訳『義務教育課程標準実験教科書 語文 六年級 上冊』雲南民族出版社, 2012年12月。(発行部数不明)
- 楊一紅翻訳『義務教育課程標準実験教科書 語文 六年級 下冊』雲南民族出版社, 2012年12月。(発行部数不明)

---

<sup>15</sup> 第二期では元となる漢語版教科書の本文が全て含まれているため、漢語版の書誌情報については省略する。

〔第二期・彩色版〕（いずれも発行部数不明）

和潔珍翻訳『義務教育課程標準実験教科書 語文 一年級 上冊』雲南民族出版社, 2011年7月。

楊一紅翻訳『義務教育課程標準実験教科書 語文 一年級 下冊』雲南民族出版社, 2011年7月。

和学才翻訳『義務教育課程標準実験教科書 語文 二年級 上冊』雲南民族出版社, 2011年11月。

趙慶蓮翻訳『義務教育課程標準実験教科書 語文 二年級 下冊』雲南民族出版社, 2011年11月。

和潔珍翻訳『義務教育課程標準実験教科書 語文 三年級 上冊』雲南民族出版社, 2013年7月。

趙慶蓮翻訳『義務教育課程標準実験教科書 語文 三年級 下冊』雲南民族出版社, 2013年7月。

和秀清・和潔珍翻訳『義務教育課程標準実験教科書 語文 四年級 上冊』雲南民族出版社, 2014年6月。

楊一紅翻訳『義務教育課程標準実験教科書 語文 四年級 下冊』雲南民族出版社, 2014年6月。

楊文涛翻訳『義務教育課程標準実験教科書 語文 五年級 上冊』雲南民族出版社, 2015年5月<sup>16</sup>。

楊一紅翻訳『義務教育課程標準実験教科書 語文 六年級 上冊』雲南民族出版社, 2016年5月。

楊一紅翻訳『義務教育課程標準実験教科書 語文 六年級 下冊』雲南民族出版社, 2016年5月。

〔第二期・関連書籍〕<sup>17</sup>

和潔珍編著『学前教材 上冊』雲南民族出版社, 2012年3月。

---

<sup>16</sup> 五年級下冊は未入手のため、未確認。

<sup>17</sup> 『小学語文詞語手冊』は早くから漢語版の書籍が存在し、ここに示したのはそのナシ語版である。また、『小学語文教輔』は各学年の『語文』に準拠した補助教材である。

- 和潔珍編著『学前教材 下冊』雲南民族出版社, 2012年3月。
- 趙慶蓮·楊一紅識『小学語文詞語手冊』雲南民族出版社, 2014年12月。
- 雲南省教育庁編·趙慶蓮識『小学語文教輔 二年級·上冊』雲南民族出版社, 2015年12月。
- 雲南省教育庁編·趙慶蓮識『小学語文教輔 二年級·下冊』雲南民族出版社, 2015年12月。
- 雲南省教育庁編·趙慶蓮識『小学語文教輔 三年級·上冊』雲南民族出版社, 2016年12月。
- 雲南省教育庁編·和潔珍·和洪生識『小学語文教輔 三年級·下冊』雲南民族出版社, 2016年12月。
- 雲南省教育庁編·趙慶蓮識『小学語文教輔 四年級·上冊』雲南民族出版社, 2017年12月。
- 雲南省教育庁編·和潔珍識『小学語文教輔 四年級·下冊』雲南民族出版社, 2017年12月。